
籠鳥

藍村 泰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

籠鳥

【Nコード】

N1326K

【作者名】

藍村 泰

【あらすじ】

『鳥は鳥でも、アラン……お前は灼熱の不死鳥』

鳥籠の続編です。R15くらいはあるかもです。

『鳥は鳥でも、アラン……お前は灼熱の不死鳥』

「ここに貴方の妹がいるのよ」

母さんは自分のお腹を撫でながらそう言った。優しい眼差しは俺にも伝染し、丸いお腹を見つめてみた。動いている様子はないが、確かに生命が存在しているだろう気配は濃厚に感じられた。

「妹の名前は？　もう決めた？」

俺の問いに母さんは微笑む。

「母さんの名前と同じにしようかと父さんに相談してるのよ」

母さんはこの国でも巨大な権力を持つ教団に仕える尊き女性達と同じく——“シスター”と言う。教団絡みのことで、あまりいい噂を聞いたことがない俺は、懸念を示した。

「同じ名前は何か可哀想だよ。違う名前にしてあげて」

母さんは苦笑して、俺の頭を撫でた。

「そうねえ、“小さなシスター”以外に思いつく名がないのだけど」それが母さんとの最後の別れになると、知る由もなかった。

月が教団の館にかかっている。そっと木の影より覗くと、門番が二人いるのがわかった。欠伸を噛み殺しているところを見れば、多分夜通しの番なのだろう。この夜更けを狙ったのは間違いでなかった。

運命の刻は一瞬。

月が黒い雲に隠れた隙に、門へと全速力で駆け出した。門番は俺を捕らえようと慌てたが、子供特有のすばしっこさについてこれない。

広大な館を走り回った。真夜中にも関わらず、明かりが灯っている。侵入者である俺を捕まえようとしているようだった。

「見つけた、いたぞ！」

無数の手が伸ばされる。壁際に追い詰められた俺は、覚悟を決めて彼らを睨み付けた。

「母さんを返せ———悪魔の集団めっ」

近頃多発している人拐いは教団の仕業だと町の人達は噂していた。もしかしたら、二ヶ月前に買い物へ出掛けたまま帰って来ない母さんがいるかもしれない。そう考えると、いても立ってもいられなくなり、こうして教団へ侵入した。

黒い外套を着た者達は珍しい物を見るような目でこちらを眺める。這いずりまわるようなその目に嫌悪を覚えた。

「プラチナブロンドの髪にシアンブルーの瞳。……母親の名前は」

「シスター」

答えれば、「ああ」とすぐに一人の男がにやついた。

「お前、あの淫婦の息子か。どおりで似てるわけだ」

淫婦、という響きを聞き、頭に血が上るのを感じた。母さんはそんな人間ではない。言葉を発した男の鳩尾に拳をねじり込む。

怒号が轟き、俺は頭为天辺を鈍器で殴られ、意識を手放した。

一面に赤。家具も、飾りも、全てが赤。そんな部屋の真っ赤なベッドで目覚めた。手足は拘束されている。

「初めまして、わたしはこの教団の教皇だ」

「……………」

「母親のシスターを取り戻しに来たんだろうが、残念ながら、ちょっと帰してあげられない状態だね」

「何だ？」

「聖職者達も言ってただろう。君の母親は淫婦になったんだよ。わたし達から離れてくれない」

「それはどうい———」

「教皇様あ」

間延びした甘ったるい声が俺の言葉を遮る。頭を軽く上げた。目に飛び込んで来たのは、紛れもなく、母さんで。

「母さん……！」

元々細身である母さんは、お腹だけパンパンに膨らませている。臨月が近いのだ。妖艶な紫色のドレスを着た彼女は、教皇にしなだれかかる。女の香りが辺り一帯に充満する。

「教皇様、近頃ご無沙汰だから、今日こそ相手してくれるって言うてたじゃない。酷いわ。私の子と遊んでるなんて」

脂汗が額を伝う。最悪の事態を想像してしまい、それを振り払うために首を振った。

教皇は母さんの腰を引き寄せて嘲け笑う。

「やれやれ、シスター。子供の目の前で秘め事を繰り広げる気かい？ はて、困った美女だ」

「やめろ！ お腹に赤ちゃんだっているんだぞ……正気か!？」

十歳の誕生日を迎えている俺にはわかった。これから二人が行おうとしていることがどんなことなのか。ショックが大き過ぎて、涙が出る。

二人は声を涸らして叫び続ける俺を無視して、行為に耽った。手足を拘束されているため、耳を塞げない。真横で繰り広げられることが信じられないまま、夜は更けた。

母さんは、教団に何かされたんだと薄々気付く。放心状態のまま、涙を流し続ける俺に、それらしきことを教皇が言っていた。

聖なる犠牲の名のもとに行われる、人体実験の生け贄。噂は本当だったのだ。

反抗も何も、する気力が湧かない。教団の者達のされるがままに俺は実験材料となった。他の者は必死で抵抗していた。それを横目見ながら、目映いライトに照らされて体が切り開かれて行く様を傍観していた。

目に映る全てが砂嵐のようで。耳に届く全てがノイズのようで。

何も感じなかった。母さんがお産の際に死んだと聞いた時でさえ、無反応だった。

反抗しない俺を都合が良いと思ったのだろう。教皇は俺を殺してホルマリン漬けにしたりしなかった。

教団での生活も六年目に差し掛かった頃、ようやく鏡に映る自分の姿をまともに見れるようになった。これまでは、見ても見えていなかったのだ。

自慢だったプラチナブロンドの髪は、白く変わり果てており、シアンブルーの瞳は紅くなっている。日に焼けていた肌は青白く変化している。頭に伝わっていなかっただけで、心は恐怖に満たされていたのだと、その時初めて気が付いた。

洗面所の鏡を素手で割った。破片によって流れ出る血が俺を覚醒させ、双眸に光が宿る。

———教団から脱け出す。

決意を胸にした瞬間、今まで自分を守るために閉ざしていた心の扉が開き、痛みで全身が満たされた。

「……………脱け出そうなどと、考えてはいまいな？」

俺に表情が戻ったことを敏感に察知した“主治医——実験対象の管理をしている医者——”はカルテにペンを走らせながら、訊いてきた。

「考えてる、と言ったら教団は俺を殺すんだろう」

「殺しはしないだろうが、早々に脱出を困難にさせる実験をするだろうな」

主治医は無機質な声色でそう告げた。

俺は口の端を吊り上げる。

「何をするんだ？ この前の奴みたいに手足を逆さにするのか、それとも切断するのか、脳をいかれさせるのか……」

「ゴム治療」

端的に彼は言った。今、外では皮膚病が流行っているらしい。それに伴い、皮膚を人工皮膚——ゴムにしてしまえば感染を食い止め

られるのではないかという意見が上層部で出ているらしい。

「お前で試すかもな。教皇は目敏いから」

憐憫の情など一切見せずに主治医は言い切った。

体の内側と外側を入れ替えたように激しい痛みが何日も何日も続いた。

首から下を見る勇氣もない。これならいっそ、殺してくれた方が楽なのにした。思った。

動かせばゴムの隙間から血が噴き出す。感情が昂れば昂る程、発作のように血は輸血が必要になるくらい噴き出した。

「実験は失敗だ。この方法で皮膚病感染は食い止められない」

組み立て途中で部品が足りないことに気付いたプラモデルを、大抵の人間なら惜しみつつも棄てるだろう。そんな要領で、俺も棄てられた。

霜がおりるような四角い部屋でずっと――それこそ数ヵ月間いた。主治医が一日数回現れ、注射と点滴を施すから死ぬことも出来ない。涙は最早涸渇していた。

「主治医」

「何だ」

「もう、殺してくれ」

「駄目だ。お前は私が責任持って通常の生活を営めるまでに回復させる。部品など、ないなら補えば事足りる」

俺を思っていてくれてるように聞こえるが、それは違う。主治医は、己の腕を発揮したいだけだ。それに盲執し過ぎて、彼は世の中からはみ出したのだと自分で語ったことがある。

主治医のおかげもあり、半年後には歩けるまでに回復した。

四角い部屋から外を眺める。麗らかな陽気に誘われたか、小鳥が窓の縁で囀りついている。手を伸ばすが、すぐに躊躇して引っ込めた。俺のこの体温のない肌は、動物にとって恐ろしいに違いない。

何時間、外を眺めていただろう。手を繋ぎ、薬の研究も兼ねた花

園に立ち入る二人の影が見えた。一人は主治医だとすぐにわかる。ここ最近、彼としか遭遇していない。もう一人はまだ幼い少女のようだった。

その少女は光を浴びて、薔薇のように輝いて見えた。この教団にいるのがおかしいくらいだ。少女が後ろを振り向く。瞬間、彼女の容貌が俺の瞳に飛び込んできた。思わず、椅子から腰を上げる。

「そんな……いや、まさか……」

独り呟きを洩らし、呆然とその場に立ち尽くした。

日が暮れ、主治医が部屋にやって来た。彼の胸ぐらを掴み上げる。

「昼間、お前が一緒にいた少女はシスターの娘か」

主治医は驚きの表情を見せる。

「そうだが……何故、お前がシスターを知っている。シスターは六年前に亡くなっているのに」

主治医は俺がここに閉じ込められてから数年後にやって来たから、真実を知らないのだ。

予感が確信に変わり、体の力が抜けた。そうだ。教団へ乗り込んだ理由は、母親と妹のためだった。正直に言えば、母親よりもまだ見ぬ妹のために教団へ侵入したのだ。心を閉ざし、何も感じなくなっていたせいで、大切な存在を忘れていた。

「生きていてくれて、ありがとう」

今更ながら、神に感謝する。もしかしたら、殺されていたかもしれないのだ。流産してしまっていたかもしれないのだ。

手を組んで額に当てて祈りを捧げていると、主治医が顔をしかめて尋ねてきた。

「もしや、シスターの息子というのは……お前か？」

黙って頷く。

主治医に困惑が浮かんだ。

「お前が、メアリーの兄」

「メアリー？ あの子にメアリーという名をつけたのか。“シスター”ではなく」

「ああ。死ぬ間際にシスターが『この子は、メアリー』と譚言のよう
に呟いたらしい。薬によって正気でなかったらうに、その言葉だ
けは鮮明だったと前任の主治医から聞いた」

母親は、最期の最期になってようやく自分を取り戻したのだろうか。
最期の最期になって俺の願いを聞いてくれたのだろうか。

メアリー。

その名前は心に深く刻み込んだ。

「いいのか」

俺の問いかけに、男は無言で背を向けた。それは肯定を表してい
る。男にもらった発作を抑える薬と、その調合法を握りしめ、もう
一度言葉を投げかける。

「お前、死ぬぞ？」

「一度は死んだ身。別に後悔はない。それよりも、早めに教団を潰
しに来い」

男――主治医は簡潔に返した。

俺はぐつと拳に力を入れて駆け出す。主治医の詭弁により、今、
教団内は騒然としている。侵入者がいると彼は触れ回ったのだ。も
しろん、全くの嘘である。混乱に乗じて、俺の脱走は敢行された。

「メアリーは、ここでは眩しすぎる」

ポツリと主治医は呟いた。

『籠の鳥は、いずれ己を閉じ込めていた籠を溶かすだろう』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1326k/>

籠鳥

2010年10月8日15時13分発行